

◆ 作業療法領域

「早期離床 × 作業療法 — ICU でも OT が活躍する時代へ！」

新名 大介（徳島赤十字病院）

みなさんこんにちは。離床大好き OT の新名です。

今回は「早期離床 × 作業療法 — ICU でも OT が活躍する時代へ！」というテーマで、急性期医療の現場における作業療法士（OT）の価値を紹介します。

「急性期で OT って何をするの？」「PT とどう違うの？」と聞かれること、ありますよね。

でも実は、ICU や急性期病棟でも OT は大きな役割を果たしています。

アメリカの Smith らは、

2012～2021 年に行われた ICU での OT 介入研究 9 本を調査し、

“Early mobilization” ならぬ “Early Engagement” というキーワードを提示しました。

“Engagement” とは「関わり・主体的参加」のことで、ICU 入室直後から OT が介入し、患者と “生活” とのつながりを早期に取り戻すという考え方です。

Smith らの報告では、整容・食事・更衣などの ADL 練習、

ROM やポジショニングなどの身体介入、認知・注意・遂行機能への刺激といった、多面的なアプローチが実施されていました。

その結果、これらの介入は ADL・身体機能・認知機能の改善に有効であることが示され、「中等度のエビデンス」が確認されています。

つまり OT が早期に関わることで、生活機能の回復が早まり、

身体機能の維持・改善や認知低下の予防にもつながるというわけです。

一方で、OT 単独の研究はまだ少なく、質の高い研究も限られています。

介入内容の標準化も課題として残りますが、

それは言い換えれば「OT が急性期で活躍できる余地がまだ大きい」ということ。

OT の強みは、身体だけでなく、

ADL・認知・家族支援といった “生活全体” を扱えることにあります。

端坐位で歯磨きをする、立位で趣味の動作を再現する、

車いすで屋外へ出てみるなど、こうした「離床 × 作業療法」は、
ICU の早期段階から生活行為の再構築を促し、せん妄や PICS の予防にも寄与します。

早期離床は、もはや PT だけの領域ではありません。

OT もまた、ICU で「生活を取り戻す専門職」として欠かせない存在です。

「ICU だから OT はいらない」ではなく、「ICU だからこそ OT がいる」。
そんな時代が、もう目の前まで来ています。

Smith M, Tsai S, Peterson E. Occupational Therapy Interventions and Early Engagement for Patients in Intensive Care: A Systematic Review. Am J Occup Ther. 2025;79(1): <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/39688893/>